

大食い娘 クロアチア

昔むかし、あるお母さんに、娘がひとりありました。その子は、食べても食べても、いくらでも食べられるので、「大食い娘」といわれていました。

ある日のこと、お母さんは、畑で働いている人たちのために、ベーコンを七切れ焼きました。それから、自分も畑に行つて、草取りを手伝いました。

家にいた大食い娘は、テーブルの上にベーコンを見つけました。娘は、おおよろこびで、ベーコンをたிரらげてしまいました。帰つて来たお母さんは、大声でわめいて、娘をしっかりとつけました。

そのとき、おもてを、若い王さまが通りかかりました。王さまは、となりのおかみさんに、

「いったい、あのうちじや、何をさわいでいるんだ」とききました。となりのおかみさんは、親切心でこういいました。

「どうかほうつておいてあげてくださいな。あそこの中には働きの娘がひとりいて、その子が今日、それはそれはたくさんの羊の毛をつむいだんですよ。それで、母親が、そんなに働いたら命がちぢんでしまうよといって、しかつてるところなんですよ」

王さまはそれを聞くと、

「なんと。そんな働きの娘なら、結婚を申しこもう」といいました。

王さまが行つてしまうと、となりのおかみさんは、大食い娘のお母さんのところへすつとんで行つて、

「ねえ、すばらしい知らせがあるんだよ。王さまが、あんたとこの娘と結婚したいんだつて。わたしのおかげだよ」といつて、娘が羊の毛をあんまりたくさんつむいだので母親にしかかれていると、王さまに話したことをうちあけました。お母さんは、

「まあ、とんでもないことをしてくれたね。うそだとわかったら、どんなめにあわされるだろう。それに、王さまはあんな大食い娘を養えやしないよ。」といいました。となりのおかみさんは、

「だいじょうぶだよ。王さまのほうがあんたよりお金持ちさ」といいました。

そこへ、王さまがやつて来て、娘にいいました。

「あなたが、そんなにたくさんの羊の毛をつむげるなら、わたしと結婚してくれないか」

娘は、

「いいわよ」といって、お城しろについて行きました。大食い娘は、王さまのお妃おひめさまになりました。

あるとき、王さまが、旅たびに出ることになりました。出かけるとき、王さまは、大きなふくろに羊の毛を三ふくろ入れて、お妃さまに渡わたしていました。

「二週間たったら帰ってくるから、それまでに、この羊の毛をつむいでおいておくれ」
王さまは出かけましたが、お妃さまはどうしてよいかわかりませんでした。羊の毛なんてつむいだこともありません。

ところで、お城の近くの森に、妖精ようせいが三人住んでいました。目が不自由ふじゆうな妖精と、耳が不自由な妖精と、足が不自由な妖精でした。お妃さまは、この妖精たちのことを思い出しました。

お妃さまは、大きなソーセージを二本、右の耳にぶらさげました。それから、左の耳にもソーセージを二本ぶらさげました。そして、窓辺まじべに行つて、首をあっちこっちにゆらしました。首を右にやったときには、右のソーセージを少しかじり、左にやったときには左のソーセージを少しかじりました。ぜんぶ食べてしまうまで、首をゆらしました。足の不自由な妖精が、お妃さまのようすを見ていました。このすごいわざにおどろいて、もつとよく見ようと体をのばしました。片足かたあしで立つてのびをしているうちに、妖精の足はすっかり良よくなりました。

耳の不自由な妖精も、お妃さまのこのすごいわざを見ていました。妖精は、お妃さまがソーセージを食べながら何かつぶやいているのを聞こうと、耳をすませました。あまりに一生けんめい聞こうとしたものだから、耳がすっかり良く聞こえるようになりました。お妃さまは、こうつぶやいていました。

「神かみさま、お助けください。ぜんぶきれいに食べられますように。そして、羊の毛をぜんぶつぶげますように」

目の不自由な妖精は、お妃さまのすごいわざをもつとよく見ようと、目をむきました。あまりに一生けんめい目をむいたものだから、目がすっかり良く見えるようになりました。

三人の妖精はお妃さまにいました。

「お妃さま、わたしたちを治なおしてくださいあってありがとうございます。お礼なに何をさしあ

げればいいでしょう」

お妃さまは、妖精たちに三ふくろの羊の毛をわたして、

「じゃあ、二週間以内いに、これを糸につむいでちょうだい」といいました。妖精たちは、それをやってのけました。

王さまが帰ってくる前の日、お妃さまは、ベッドのしきぶとんの下に、くるみをひとつくろ入れておきました。

王さまが帰ってくると、お妃さまは、しあがった糸を王さまにわたしていいました。

「すぐ骨ほねがおれて、体じゅうが痛いたくなりましたよ」

王さまは、

「まさか。あなたにはなれた仕事しごとじゃないか」といいました。

夜になってふたりがベッドに入ると、ベッドがギシギシなりました。

「うひゃあ、これはどうしたわけだ」と、王さまがいました。お妃さまは、

「だからいったじゃありませんか。ギシギシなっているのは、わたしの骨ですよ。糸つむぎなんてもうたくさん。小さいころから、どんなに泣なかされたことか」といいました。

王さまは、

「そういうことなら、糸つむぎなどどうでもいい。体を大事にしてくれ。もう二度と糸つむぎはさせないぞ」といいました。

それからのち、お妃さまは、何なに不自由ふじゆうなくしあわせに暮くらしましたとさ。

村上郁再話

資料『世界の民話16 アルバニア・クロアチア』飯豊道男訳／ぎょうせい